

北欧における幼児の環境教育の特徴 I

——スウェーデン王国（ストックホルム市）での視察を通して——

杉山 浩之*・高橋 泰道**

Characteristics of Environmental Education for Infant Children in Scandinavian Countries I: Through the Investigation of Stockholm in Sweden

Hiroyuki SUGIYAMA* and Taido TAKAHASHI**

はじめに

北欧諸国は世界的に見て福祉の先進国として確固たる地位を占めており、子どもの権利や障害者権利などを保障する社会としても世界をリードする国々である。さらに、自然享受権（スウェーデンの自然保護法では、「自然は全ての人のものであり、誰でも他人の所有の森や土地に入ってもよい、宅地以外なら他人の土地を歩いてもよい」とある）が認められた国としても有名であり、それを実現するために、享受される自然を保護する教育、即ち「環境教育」が行われている。また、子どもの権利条約（1989）では、「自然環境の尊重を育成すること」と規定されており、子どもの権利条約を世界で先駆けて教育に導入した北欧諸国が環境教育の先進国たる所以である。

スウェーデン王国は、森の妖精ムッレ中心に自然保護を子どもに語り、体系的な環境教育の発祥の国である。森のムッレ教室は、現在フィンランド・ノルウェーを中心に、ウェールズ・イングランド・スコットランド・ロシア・韓国・日本などに広がっている。また、グリーン

フラッグ認証団体が推進する環境教育もスウェーデン発祥である。さらに、一般的な野外保育を中心とする野外就学前学校（2017年193校）も存在する。一方、スウェーデン王国の隣国であるノルウェー王国では、スウェーデンとは異なる独自の野外保育を展開してきた。そこで、本研究では、2018年9月に北欧のスウェーデン・ノルウェーの両国の就学前学校視察を基に、それらの環境教育の特徴を明らかにすることを目的とした。

1 スウェーデン王国（ストックホルム市）における幼児の環境教育

「就学前学校カリキュラム」（2010、2019改訂予定）で「環境」領域にかかわる就学前学校の任務としては、以下のような記述がある。「就学前学校は環境問題や自然保護問題を重視する。エコロジカルな対応の仕方と将来へのポジティブな革新が就学前学校の事業に反映する。子どもが自然や環境に対して慎重に対応し、自然の循環過程に関与していることが理解できるよう寄与する。」次に子どもの発達目標として「自然のサイクルや人間と自然と社会がどのように影響しあっているかについて関心と理解を培う」「自然の科学や関係性の理解を育て、植物や動物

* 本学教授

** 鳥根県立大学

物、簡単な科学的作用や物理的現象の知識を培う」「自然科学について問題を提起しあったり話し合ったり、識別調査したり言語化する能力を育てる。」以上のように幼児期における環境教育の内容が意図されている。

2 就学前学校の実践視察

(1) 森のムッレ教室を行う園

森のムッレ教室は、妖精ムッレ (Mullen 土) が登場する環境教育でスウェーデン野外生活推進協会が1957年に始めたものである。これまで60年間に国民の20% (200万人) 以上が学習してきた。養成講座を修了したリーダーは7,000人存在する。特徴は生態系の循環性などを乳幼児から学童期に至る発達過程に応じてカリキュラムを系統的に構築し、体験の中で理論が学習されていくものである。森のムッレ教室は、野外保育中心の就学前学校と一般的な就学前学校の両方において行われている。前者としてムッレボーイ園 (1985～)、後者としてブレンニングレーベン園を視察した。ムッレボーイ園は野外生活推進協会のすべてのプログラムを取り入れた保育を実践しており、模範的存在である。

1・2歳児の午睡も野外である。

1) ムッレボーイ (森のムッレの要塞) 園

園の概要：園児35名、保育士7名と協力者1人、調理師1名

スウェーデン初の野外就学前学校 (1985年創立、90年から現在の施設に引っ越してきた。森のムッレ教育を中心とする保育を展開する私立保育園) であり、国内外の森のムッレ教育を推進する。入園希望者は非常に多いが、保育の質を確保するために園児数は定員内に抑えている。以前は2歳児以降であったが、保護者の要望があって2年前から1歳以上から入園させている。

因みにスウェーデンでは育児休暇が1歳まで全ての保護者に保障されており、1歳未満の保育は存在しない。新学期が始まった8月から毎日保育は外で行われている。室内には1時間もいない。火水木は、森へ。月金は園庭で遊ぶ。昼食も昼寝も遊びもすべて外で行われる。1～2歳児はいつも昼食は園で食べ、昼寝はがっしりとしたベビーカーで毛布などに包まれ顔だけ出して屋根の下で行われる。

3クラス制で「クノッペン教室 (1～2歳児)」「クニュータナ教室 (3～4歳児)」「ムッレ教室 (5～6歳児)」で編成されている。年齢に応じた発達に即した保育を行いたいのでクラス分けしている。「クノッペン教室」(現在8人)では、通常80m先の森に出かけるが、もっと遠い森へ行くこともある。「クニュータナ教室」が出かける森は複数あり、それぞれに子どもに分かりやすい名前を付けている。例えば、「陽の当たる森」など。5～6歳児は2キロ先の森まで行くこともある。ムッレボーイ創設者のヨスタ・フロム氏から贈られたカヌーに乗り湖に行くこともある。大人が前に二人乗り、後ろに子どもが四人乗れる。

園庭はやや傾斜した斜面で広い。鶏小屋には4羽飼育され、土日の休日は保護者が世話をを行う。鶏には名前が付けられ、一羽は最初の園長の名前が付けられている。もし卵があれば保護者のものになる。大きな木々もある。サムリング (集い) のサークルでは、火を炊き、四季の歌を歌い、果物を食べ、話し合いが行われる。インディアンテントは森のムッレリーダーの優秀賞の副賞で頂いたものである。木工や絵画用の小屋もある。保護者が要望した列車や飛行機の遊具は保護者が制作したものである。木登りもできる。保護者が創ったであろうブランコもある。ポンプ付きの水道設備も保護者が創った

ものであるが、子どもが最も遊ぶのは、自然物である。コンポストには園庭の植物や残飯が入れられる。

プロジェクト活動も行われる。「はらべこあおむし」の絵本からチョウチョの劇へと発展したプロジェクトでは粘土細工も制作した。卵から幼虫、蛹から成虫へと変容する様子を子どもたちは様々な表現活動で楽しんだ。また、ガラスなどのゴミが捨てられていたら、それをきっかけにして環境教育のESDとしてプロジェクト活動を展開する。子どもたちの現実にゴミがあったときに問題化するのであって、唐突にゴミ問題を扱うのではない。プロジェクト活動の終わりの基準は、子どもたちの関心が薄れていくという所である。無理やりに引く張ることはしない。2週間に一回のリフレクションでプロジェクト活動の振り返りや課題確認を行っている。

ある時の保護者会では、森の中で、保護者が自画像を描いて、それを後で教室に並べ、子どもたちが自分の親の顔を当てるということをした。簡単に当たるものではなかった。親子の関係を深めたり、観察力を高めたりと様々な効果が期待される。園の保護者の家庭では「ゲーム」を避けたいという傾向が強い。望ましいことであり、家族皆で過ごそうという保護者が多い。自然の中での遊びを重視する保護者は、人工的なものを廃して、より人間的な生活を送ろうとしている。

ポートフォリオや教育的ドキュメンテーションは作成しているが、流行りのデジタル化はしていない。子どもが見るには紙ベース（媒体）が良いからという発想である。

クノッペン教室は1～2歳児であり、生活リズムを大切にしたルーチンワーク（日常的活動）が多い。

ムッレボーイは保護者との共同経営である。

園児の数を保育の質確保のため抑えるので、経営的には楽ではないとのことである。入園児の誓約書に「保育と清掃」のボランティアに保護者が入ることが明記されている。月一回ごとに全員（保育者）のレフレクション（保育の振り返り）会議が行われ、2週間に一回は、クラスごとでレフレクションを行い、ドキュメンテーションを作成するなどしている。経理は保護者が担当している。週の労働時間40時間のうち、36時間は子どもと関わる時間、4時間は会議などの時間である。園長も週に一回、4時間は子どもと関わる保育士になる。園児は7時から順次登園する。4時からお迎えがあり、5時には園が閉まる。

園から数100m離れた森の入口にいくと、「ワニの沼」と呼ぶ溝を子どもは越えなければならない。ファンタジーが随所にある。森に入っていくと、苔むした岩の下には「トロール」（妖精）のいる穴がある。そうした場所は、子どもたちが一旦集まる場所として指定されている。そこでは歌を歌ったり、物語を話したりする。森に出かけるときの約束事は「見える範囲」で行動するというので子どもたちはそれを守っている。自然の変化に気付き、五感を発達させる場所が自然環境である。

なおスウェーデンの就学前クラスは失敗されたと言われており、政府の方針で義務教育に吸収された。それで就学前から後への接続段階である就学前クラスの教師は特別な養成を受けているということである。ムッレボーイにも一時期就学前クラスがあったようである。

（以上、2018年9月20日10:00～12:00見学およびカイシャ・シェルストロム園長へのインタビューより）

2) 私立ウトシクテン野外就学前学校・野外小学校

概要：園児55名、保育士13名、調理師1人、就学前学校1993年創立（森のムッレ会員校）
学童115名、教師7名、学童保育75名、同教師5名、児童クラブ40名、同教師3名、野外小学校1994年創立（国内で初の野外小学校）公立園がかつてあった施設を利用している。ハリエット・ギューター校長。子ども5人に一人の保育士を基本とする。

園庭では、鶏を飼い卵を孵して、命の循環を学ぶ機会としている。週末は保護者が世話をする。

土の中にはミミズもいる。

教育の柱は、体験学習、野外生活、自然から学ぶ、子ども相互の関わりを支援する教師のあり方である。子どもと共に感動し、学ぶことを重視する。

週1回は1日、1グループずつ、森へ出かけて学習を行う。園児55名は5グループに分かれる。

1学年は18名規模で1クラス編成である。野外活動を行うときは、複数の学年を組み合わせるが、6年生は単独学年で活動する。一般の小学校との違いは、野外で学習できる活動はすべて野外で行うということである。いずれもナショナル・カリキュラムに沿った学習を展開する。

国内に野外小学校は9校（公立2校、私立7校）森のムッレ教室も行われている。

課題は、野外での教育に優れた教師の確保である。

（以上、2018年9月20日14:00～16:00見学およびハリエット・ギューター園長へのインタビューより）

3) プレンニンゲベーゲン就学前学校

概要：ツーラ・トーロ校長 カミラ・リンドグレン校長

園児 72名 保育士12名 森のクニユータナとムッレ教室を導入している。

スキーやスケートなども含めすべての野外活動を導入している野外就学前学校ではなく、一般的な保育活動を行う園。保育園は午前6:30～午後6:30まで開所している。

1～4歳の異年齢グループを4つ編成している。1グループ約18人にそれぞれ3人の保育士がつく。

ヴィゴツキー理論に基づく保育をベースとしている。

森のムッレ教室を展開するときは年齢別グループを編成して、テーマ学習に取り組む。

プロジェクト活動も同様に「飛行機」「救命ボート」などテーマに話し合っ

て学ぶ。
見学当日、10分ほど歩いた先の森で子どもたちは主に「つり遊び」を楽しむ。つり遊びを楽しみながら、魚の名前を覚えていくということである。子どもたちの喧嘩が少なく、遊びを楽しむ子が多く、保育者は仕事の満足度が高いということである。自然享受権は小さいときから教えているとのことである。森の中には、キノコやスズランなど毒のある植物もあるが、教えているので、これまで事故は起こっていないということである。

近隣の園もかつてエコシティーとして開発された建築マンションが多い住宅地という同じ環境にあるが、野外保育はほとんど行わない園がある。スウェーデンには野外保育園は200程度あり、一般園にも野外保育を行う所とほとんど行わない園があるのは興味深い。上のムッレボーイの隣の園もほとんど園外保育は行っていないということであった。保護者のニーズも当然あ

るので、多様な保育が展開しているようである。ただ、公立園では教育的ドキュメンテーションが導入されているが、どんな保育方法・内容でも子どもの活動を振り返るドキュメンテーション作成は可能である。

校長による〈プレゼンテーション〉より

野外保育のためには子どもは「しっかりとした雨具」を着ることが大切。寒くては楽しく活動できない。リンションピン大学の野外教育学教授から「自然の中にあるものを教材にして発見することが大切で、発見のためには園庭では不十分であること。リフレクションしながら繰り返して学ぶが大切であること」を聞いている。自然享受権を教えるが、教師のあり方も重要である。子どもは大人を見て学んでいるからである。大人の愛情を感じて安心して遊びに出かけられるので、コミュニケーションは重要である。教師に要求されることは、野外に出ることが楽しいこと、発見のプランと柔軟性、教師の知識と動機づけと態度、子どもと共に学び分かち合う姿勢である。

カリキュラムの4つの柱は、1 自然の知識
2 自然享受権 3 デモクラシー 4 影響。

デモクラシーとは教育内容の決定に子どもも参加するということである。サムリングでのリフレクションや保護者も含めてドキュメンテーションや保護者会での討論を経て教育内容を決定していくシステムをデモクラシーという。影響は、子どものアイデアや表現を教育内容の決定の参考にしていくことである。

第三者評価による査察もある。4年に一度義務付けられている。保育内容や労働条件について主に評価される。前回の評価では、デモクラシーが不足しているということを指摘されたので、上に述べたようなデモクラシーの工夫をしてきた。遊びが選択できるということだけでは

不十分で子どもの学びや興味を生かした保育をしていくことが課題であると指摘されたのである。このことを公表されたということは、この園長の成長意欲や園の発展性を期待させるものである。

最後に、子どもからカリキュラムへの影響について紹介していただいた。シートに移った影を子どもが発見し、そこから劇づくりが始まった。劇づくりも子どもたちと教師が一緒になって作り上げたが、最後の観賞する段階で、さらに、子どもたちから「劇を鑑賞するには、お菓子が必要ということで、リンゴを与えたことがある。」高いビルの話からエッフェル塔の制作まで展開した。

(以上、2018年9月21日10:00～12:00見学およびツアー・トーロ校長 カミラ・リンドグレン校長へのインタビューより)

(2) グリーンフラッグ認証機関の環境教育

グリーンフラッグとは、50か国で行われているエコスクールプログラムを認証する環境教育財団 (FEE) が発行する認証である。全校の学級が取り組むことが必要である。スウェーデンでは就学前学校も入れ2,500校が承認されている。自然の循環に合わせた社会 (持続可能な社会) を目指す環境教育を実践することを目的としている。テーマは、「ライフサイクルと健康」「身近な環境」「水資源」「地球温暖化とエネルギー」「消費生活」「ゴミのリサイクル」以上、6つの中から選び、その後、目標 (例えば「学校の紙を全部リサイクルする」「環境にやさしい洗剤を使う」など) を5つ決める。日本でも FEEJapan による認証が行われている。

おわりに

北欧において幼児の環境教育の展開事例を報

告した。それぞれに特徴があるが、今回の調査報告はスウェーデンの幼児のムッレ教育を行う園の保育の様子であった。ノルウェーの視察報告は第二報で行う予定である。今回の調査報告では、以下のことが指摘できる。

1) 子どもの権利条約を土台とした保育制度が浸透しており、両国とも約1:5の割合で子どもは保育者からの関わりを受けて教育及び養護の面で成長発達を支援されている。

2) 保護者や子どもたちが保育活動の決定に参画し、カリキュラムに影響を与えるという仕組みが実践の場に定着している。保育者は実践しながらカリキュラム構成や子どもとの関わりにおいて専門知識や技能を成長させることが可能である。

3) 園の周囲には遊びに適切な自然環境があり、1歳児から5歳児まで野外中心の保育を展開する実践がある。ほとんどが異年齢縦割り保育であり、同年齢クラスはほとんどない。1~4歳や1~5歳クラスで1グループ10~15人ぐらいで活動している。

4) ESDに重なる環境教育を展開するスウェーデン野外生活推進協会の「森のムッレ教室」は、ムッレボーイ園のようにムッレ教育中心以外の

一般園にも活動が展開している。また、野外小学校においても「ムッレ教育」は小学生用のカリキュラムで活動が展開している。

5) 公立では必ず行われている教育的ドキュメンテーションを伴うレッジョのプロジェクト・アプローチは、私立では行われている場合もあるが、一つの法人内で、モンテッソーリ教育の中心園や野外保育中心の園やプロジェクト中心の園がある。

6) 活動の流れ・成果や意義などを写真や文字で可視化してまとめるドキュメンテーションの手法は、森のムッレ教育にも活用されている。デジタル化するかどうかは園によって異なる。

主要参考文献

- 1) 杉山浩之(2018)「乳幼児期の環境教育の研究～スウェーデン型自然保育『ムッレ教育』をESDの視点から分析する～」(『広島文教教育』第32巻2017、pp.47~64所収)。
- 2) 森のムッレ協会編集(2018)「身近な自然と遊んで育つ保育実践～スウェーデンの自然環境教育から～」わかば社。
- 3) スウェーデン「就学前学校カリキュラム」(2010、2019改訂予定)については、以下を参考。
白石淑江編著「スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活用：子どもから出発する保育実践」(2018)新評論。



ムッレボーイ園 1
スウェーデンで最初の野外保育園



ムッレボーイ園 2
妖精 Mullen が子どもたちに自然保護を語る



ムッレボーイ園 3
1歳児が遊ぶ森 園から歩いて 100 m



ムッレボーイ園 4
環境教育 (ESD) の重要なツール：コンポスト



ムッレボーイ園 5
園庭の岩盤